

A級戦犯の死刑執行手順書

永 田 憲 史

目 次

- 1 死刑執行手順書等の発見
- 2 分 析
- 3 終わりに
- 資料1：死刑執行手順書
- 資料2：被執行者の遺体受領書
- 資料3：被執行者の指紋押捺書

1 死刑執行手順書等の発見

いわゆるA級戦犯として死刑が確定した7名については、1948年（昭和23年）12月23日に巣鴨プリズン（Sugamo Prison）において死刑が執行された。

今般、その直前に作成されたとみられる死刑執行の手順に関わる書類（以下、死刑執行手順書）（資料1）、被執行者の遺体受領書（資料2）、被執行者の指紋押捺書（資料3）と考えられる英文の文書を発見することができた¹⁾。A級戦犯の死刑執行手順書は、これまでその存在すら十分に認識されておらず、同文書の存在及び内容が明らかとなったのは初めてである²⁾。その死刑執行手順

1) この発見の一部については、日本語では「A級戦犯死刑、指紋で確認 米公文書に『執行手順』東条元首相ら7人 関係者証言と符合」として、英語では“Document detailing war criminal execution procedures found”として平成25年（2013年）6月7日に共同通信社より写真付きで配信され、同月8日付の高知新聞朝刊や長崎新聞朝刊に1面トップ記事として掲載されるなど、地方紙を中心に40紙に掲載された。

2) 東京裁判の研究で知られる栗屋憲太郎立教大学名誉教授は、前掲注(1)の共同通信社の取材に対して、「A級戦犯の死刑執行までの経緯を裏付けた公文書が表に出るのは初めてで、東京裁判の締めくくりともいえる場面を記した貴重な資料だ。」

書の画像データを示しつつ翻訳して紹介し、被執行者の遺体受領書及び被執行者の指紋押捺書を資料として提供するとともに、一般刑事犯に対する死刑執行と比較する観点から、若干の分析を行なうこととしたい。

これらの文書は、もともと、アメリカ合衆国第8軍が作成及び保管していた文書であって³⁾、現在では、米国国立公文書館が原本を収蔵している⁴⁾。そして、その原本をマイクロフィッシュで複写したものが我が国の国立国会図書館憲政資料室に日本占領関係資料の一部として収蔵されている⁵⁾。当該文書は、「巣鴨プリズン記録 (Sugamo Prison Records)」と称される文書群のボックス番号371番、フォルダ番号3番の一部である。我が国の国立国会図書館が付したフォルダの表題は「執行ファイル (Execution Files)」である⁶⁾。原本が作成又は保管された時期は1948年12月以降であり、作成終了年月は不明と表記されている。

今回発見された文書については、アメリカ合衆国第8軍が作成した真正な公文書であり、資料としての価値は極めて高いと考えられる。

2 分 析

筆者の専門は刑事学であり、死刑の執行方法を研究する観点から、我が国で行なわれてきた一般刑事犯に対する死刑執行との差異について言及することとしたい。

↘米軍が執行を担ったことは知られているが、これほど詳細な内容は明らかになっていなかった。特に、立ち会った証人の多さに目を引かれる。A級戦犯の処刑は連合国側にとっても特別な出来事だったのだろう。12月23日の執行は、当時皇太子であった天皇陛下の誕生日に合わせたとの説もあるが、真相はこの文書からも分からない。」と話している（平成25年6月7日に共同通信社より配信）。

3) RG338, Eighth Army, Sugamo Prison Records.

4) RG554, National Archives and Records Service.

5) 詳しくは、国立国会図書館憲政資料室のホームページを参照。<http://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/SP.php>.

6) 国立国会図書館憲政資料室の請求記号は、SP-00876 及び SP-00877 である。

(1) 死刑執行手順書作成の理由

A級戦犯の死刑判決は、極東国際軍事裁判所条例に基づいて言渡されたところ、同条例は、「本裁判所ハ有罪ノ認定ヲ為シタル場合ニ於テハ、被告人ニ対シ死刑又ハ其ノ他本裁判所ガ正当ト認ムル刑罰ヲ課スル権限ヲ有ス」として、法定刑について概括的な規定を有するのみであった。しかも、同条例は、死刑の執行方法について具体的には全く規定していなかった。

当時も、そして現在に至るまで、日本の法令は、死刑の執行方法を絞首刑とすることについては定めているものの、その具体的な建物の様式や執行の設備及び道具などに関する規定は、絞罪器械図式（明治6年太政官布告第65号）があるに留まる。しかしながら、この図式によれば、刑場は地上に絞架を組むものであって、被執行者に階段を上らせることとなるはずであるところ、20世紀になると、被執行者を地下に設けた掘割へ落下させて絞首して死亡させる地下掘割式と呼ばれる別異の方式が何らの法律上の根拠なく採用されるに至ったとされる⁷⁾。また、死刑執行の手段である器具についても同図式とは異なる形状の縄が利用されているとされる。さらに、死刑執行に至る具体的な手順について定めた法令は存在しなかった。

そのため、A級戦犯の絞首刑の執行についても、その手順を新たに具体的に定める必要があったと考えられる。

(2) 死刑執行手順書の作成時期

死刑執行手順書には、1948年12月とのみ記載されており、日付の記載がない（資料1）。また、書状命令（Letter Order）の日付及び文書番号、被執行者に対する執行日の通告日、証人などの出頭日、執行日、当該文書の機密区分の変更日時については、タイプライターで打ち込まれておらず、手書きで記入されている。

これは、1948年11月25日以降の1週間以内に執行するよういったん命じられ

7) 小野清一郎『ポケット註釈全書 改訂監獄法』（有斐閣、1970）464頁、大阪高判平25年7月31日公刊物未登載。

たものの、アメリカ合衆国の連邦最高裁判所に対して人身保護請求が行なわれたため執行が延期され、同年12月20日に同請求が棄却されたという事情⁸⁾が影響していると思われる。すなわち、死刑執行手順書がいつごろ作成されたかは不明であるものの、人身保護請求の棄却を見越して日付などを空欄として文書が作成され、同請求の棄却後にすぐさま手書きで日付などが記入されたものと考えられる。

(3) 死刑執行手順書の最終文書性

死刑執行手順書は、① 発出された年月については記載されているものの、日付が記載されていないこと、② 執行日などの日付が手書きで記入されていること、③ 棒線で訂正された箇所が4箇所あることから、この文書をもとに正式の文書が作成された可能性があるようにも思われる。

しかし、(a) 当該文書をもとにした正式の文書があるとすれば、当該文書が当該文書と同じフォルダに収められている蓋然性が高いところ、そのような文書は当該文書と同じフォルダには存在しなかった。また、(b) 当該文書の末尾には、作成名義人の *Phelps* 大佐の署名が記載されている。そのため、当該文書が正式の文書として利用された可能性が高いと考えられる。

そうだとすれば、執行の準備を開始するまでに日付や訂正箇所をタイプする時間的余裕が乏しかったことが窺われる。

このように急かされるように執行しなかった理由について、死刑執行手順書からは明らかではない。

(4) 執行開始日時

執行開始日時は1948年12月23日午前0時1分又は可能な限りその後すぐにとされている（資料1の1）。

「可能な限りその後すぐに」との文言が入れられたのは、被執行者が7人で

8) W.J. シーボルト著・野末賢三訳『日本占領外交の回想』（朝日新聞社、1966）146-148頁。

A級戦犯の死刑執行手順書

あるのに対して、巣鴨プリズンに設置されていた絞首台が5基にすぎなかったため⁹⁾、被執行者を2つのグループに分けて執行する必要があったためであると考えられる。死刑執行手順書においては、4人のグループと3人のグループに分けて執行するとされている（資料1の14）。

なお、執行日を12月23日としたことについては、当時皇太子であった今上天皇の誕生日に合わせたとする見解があるが¹⁰⁾、死刑執行手順書からその当否を窺い知ることはできなかった。

(5) 執行の非公開並びに撮影及び取材禁止

執行は非公開とされ、指定された証人以外の者は、記者やカメラマンも含めて立入禁止とされた（資料1の2乃至4）。また、執行前に護衛兵及び死刑囚守備隊を配置するとされた（資料1の11）。さらに、死刑囚側を不適切に傷付けることを避けるために、あらゆる予防策がとられなければならないとされている（資料1の19）。加えて、執行は、適切な厳粛さを持って見守られ、軍隊的な正確さを持って実施され、関与者は示威的態度をとってはならず、あらゆる種類の不適切な行為が許容されないこととされている（資料1の20）。

これらは、A級戦犯の執行を滞りなく行なうためのものと考えられる。また、当時既に、アメリカ合衆国では、死刑執行方法のうち絞首刑が円滑に執行することが難しい方法であると理解されていたことも影響していたと考えられる¹¹⁾。

9) 織田文二『巣鴨戦犯刑務所特有語辞典』（清風、1986）81-82、229-231頁、織田文二著・茶園義男監修『看守が隠し撮っていた巣鴨プリズン未公開フィルム』（小学館、2000）110-113頁、小林弘忠『巣鴨プリズン——教誨師花山信勝と死刑戦犯の記録——』（中央公論新社、2007）266頁。

10) 例えば、猪瀬直樹『ジミーの誕生日——アメリカが天皇明仁に刻んだ「死の暗号——』（文藝春秋、2009）。

11) 例えば、ニューヨーク州では、様々な死刑執行方法を検討した報告書が E. T. Gerry らによってまとめられて1888年に同州議会に提出され、同州の絞首刑廃止に大きな影響を与えたとされる。同報告書においては、主に絞首刑の問題点が指摘されている。New York Commission on Capital Punishment, *Report of the Commission to Investigate and Report the Most Humane and Practical Method of Carrying Into Effect the Sentence of Death in Capital Cases: Transmitted to the Legislature* /

このことは、絞首刑を円滑に執行できない懸念が存在したようで、絞首台の徹底的なテストを求めるとともに、絞首刑の執行が完全に終了しなかった場合の手続が記載されていることから窺われる（資料1の10及び14）。これらのことから、被執行者が直ちに絶命せずに再度執行され、その情報が外部に漏れた場合の日本国民の反応を懸念していた可能性もある。

(6) 執行日の告知、内容

執行日の告知は、実質的には執行前日と言ってよい執行前々日の12月21日夕刻とされている（資料1の6）¹²⁾。

当時、一般刑事犯に対する死刑執行日の告知も、執行当日ではなく、執行前日又はそれ以前に行なわれていたようである。A級戦犯の死刑執行についても、このような慣行が影響を与えた可能性が否定できない。

執行日の告知については、当初タイプされた段階では、告知内容を理解した旨の陳述書への署名を被執行者に求めるとされていた。しかし、手書きでなされた修正により、告知内容の理解を被執行者に尋ねるのみとされ、通告の事実を証人が証明することとされた（資料1の6）。

このような変更がなされた理由について、死刑執行手順書からは明らかではない。

(7) 教 誨

執行日の告知後、執行に至るまで、教誨師及び宗教家が被執行者のために接触することが認められている（資料1の6）¹³⁾。教誨師は、執行の際に、絞首台の最下部まで付き添うものとされている（資料1の7）。教誨師として花山信勝氏が死刑執行手順書に記載されている（資料1の16）。

↘ of New York, January 17, 1888 (Argus Company, Printers, 1888), pp. 34-40, 54-77.

12) 告知の様子については、小林・前掲注(9)274-276頁参照。

13) 実質的には執行前日と言ってよい執行前々日の12月21日から巣鴨プリズンに泊まって教誨を務めたとされる。小林・前掲注(9)273頁参照。

A級戦犯の死刑執行手順書

これらは、被執行者の心情の安定を図り、円滑に執行を行なうことを目的としていたと考えられる。

(8) 執行の準備

巣鴨プリズンの所長は必要なロープ、目隠しフード、腰ベルト並びに腕及び脚の枷を提供して4つの落とし板を直ちに利用できるようにしておくとしていた（資料1の10）。

4基の絞首台を利用可能にする必要があったのは、前述の通り、4人のグループと3人のグループに分けて執行するとされていたためである。

また、前述の通り、絞首台の全ての必要な設備が非常に優れた状態にあることを確認するために徹底的な点検を実施しなければならないとされている（資料1の10）。

これは、前述の通り、円滑に執行することが困難であると考えられていたA級戦犯の絞首刑による執行を滞りなく行なうためのものと考えられる。

なお、当時、一般刑事犯の絞首台は地下掘割式であったのに対して、巣鴨プリズンの絞首台は地上絞架式（屋上絞架式）であった¹⁴⁾。このような方式が絞罪器械図式に則ったためであるのか、それとも、アメリカ合衆国で伝統的な絞首台であったためであるのかについては、死刑執行手順書から明らかでない。

(9) 執行関与者及び証人

執行の責任者は、死刑執行手順書に署名している *Phelps* 大佐又は巣鴨プリズンの所長であった *Handwerk* 大佐とされている（資料1の16）。

執行官は1名であり、3名の執行補助者とともに所属も含めて黒塗りにされている（資料1の9及び16）。

このほか、書記官1名（その職務については、資料1の18）、軍帯同司祭1名、医官6名、死亡記録サービス1名、通訳1名、教誨師1名については氏名が記載されており、前述の通り、教誨師として花山信勝氏が記載されている

14) 織田『巣鴨戦犯』・前掲注(9)81-82頁。

(資料1の16)。一方、護衛兵及び必要な追加職員については、氏名が記載されていない(資料1の16。人選については、資料1の12)。

一般刑事犯に関して、法務府(現・法務省)からGHQに提出された当時の死刑執行起案書及び死刑執行始末書には、執行官の記載がなく¹⁵⁾、執行に関与する者が記載されている点で死刑執行手順書は特徴的である。

次に、証人として、巣鴨プリズンの所長であった *Handwerk* 大佐を含めて9名が記載されている(資料1の17)¹⁶⁾。

法務府からGHQに提出された当時の死刑執行始末書には、執行立会者として検察官及び検察事務官が記載されており¹⁷⁾、死刑執行手順書と類似している。

(10) 執 行

被執行者は、指揮官及び必要な護衛兵によって護衛されて死刑囚舎房から絞首台の壇上まで移動する(資料1の14)。前述の通り、教誨師は絞首台の最下部まで付き添うものとされている(資料1の7)。被執行者が執行責任者に同定され、執行者が技術的な点を細部に至るまで完全に確認された後に、執行責任者の指示により踏板が外されて執行される(資料1の14)。

(11) 死亡確認

執行後に遺体を確認して死亡したことを宣告するため、2人の軍医と4人の医療部隊の職員を執行に立ち合わせる(資料1の8。人選については、資料1の16)。医官は死亡証明書を用意し、被執行者1人について1枚ずつの謄本を執行報告書に添付する(資料1の8)。

15) 拙著『GHQ文書が語る日本の死刑執行——公文書から迫る絞首刑の実態——』(現代人文社、2013)40-131頁。

16) 証人として立ち会った者の記録として、シーボルト・前掲注(8)148-152頁。

17) 拙著・前掲注(15)40-131頁。

(12) 遺体の取扱及び指紋の押捺

巣鴨プリズンの所長は、監視の下、執行後可及的速やかに被執行者の遺体を死亡記録サービス将校（人選については資料1の16）に引き渡す（資料1の15）。

死刑執行手順書が収められていたフォルダから、執行された7名の遺体を情報サービス将校が受け取った際の遺体受領書を発見することができた（資料2）。7名の遺体について、1名につき1枚ずつ、計7枚の遺体受領書が作成されていた。いずれも、遺体の受領日は執行日と同じ1948年12月23日と記載されている。

死刑囚の指紋は、執行後、遺体の最終処分前に押捺される（資料1の13）。

指紋を押捺するよう求めたのは、判決言渡しを受けた者と被執行者の同一性に疑義が呈せられた場合に備えるためであると考えられる。

当時、一般刑事犯の死刑執行の場合に指紋の押捺が求められていたのかは不明であり、指紋の押捺は、戦争犯罪人、とりわけA級戦犯だけになされた扱いである可能性がある。

死刑執行手順書が収められていたフォルダから、執行された7名の指紋を押捺した書類（指紋押捺書）も発見することができた（資料3）。指紋押捺書は、外国籍の敵兵又は戦争犯罪受刑者（Alien Enemy or Prisoner of War）の基礎的人的記録（Basic Personal Record）という書類が流用されている。同記録書類は1名につき2ページずつあり、身長、体重、年齢などを含む被収容者の基礎的な情報を記録するものであって、写真の貼付スペースなどもあり、執行されたA級戦犯の7名以外の戦争犯罪受刑者については基礎的な情報の全て又はほとんどが記入され、写真も貼付されていた。これに対し、執行されたA級戦犯の7名については、「被収容者の氏名」、「追加的データ」、移送情報を記入する欄以外は記入されず、指紋が押捺されているのみであった。指紋は、両手の指合わせて10指全てが押捺されていた。

東條英機元首相の指紋押捺書以外には、「追加的データ」の欄に、「我々は、本文書に記載されている指紋が極東国際軍事裁判に訴追され、審理され、1948

年11月12日に判決の言渡しを受け、本日1948年12月23日に巣鴨プリズンで執行された〇〇〇 〇〇〇として我々に了知されている遺体から採取されたものであることを証明する。」との文が記されている。この文のうち、「12月23日」の部分は空欄が用意されていて手書きされており、その余の部分はタイプライターで打ち込まれている。そのため、死刑執行手順書同様、事前に準備されていたものと思われる。

東条英機元首相の指紋押捺書には、「追加的データ」の上の空白部分に「1948年12月23日」と記載され、「追加的データ」の欄に、「我々は、本文書に記載されている指紋が極東国際軍事裁判において審理され、有罪判決の言渡しを受け、本日0時1分、巣鴨プリズンで執行された東条英機として我々に了知されている遺体から採取されたものであることを証明する。」との文が記されている。他の6名の指紋押捺書とは異なり、全てタイプライターで打ち込まれている。執行日が空欄とされていないため、この文書のみ執行日又はその前日に作成された可能性が高い。その理由としては、予め用意してあった文書を指紋押捺時に汚損してしまった可能性などが考えられよう。

東条英機元首相の指紋押捺書も含めた7人分全てにおいて、移送情報を記入する欄には移送情報は記入されず、「証人」と2か所にタイプライターで打ち込まれ、3人の証人の氏名、番号、階級も同様に打ち込まれている。そして、証人3人の署名がなされている。

遺体の最終的処分は、第8軍の将校の監督の下で実施される（資料1の15）。遺体の最終的処分とは、火葬などの埋葬を言うと考えられる。

3 終わりに

極東国際軍事裁判については、事後法に基づいて犯罪の構成要件が定められたという法的な問題点が指摘されてきた¹⁸⁾。

しかし、法的な問題点は、それに留まらない。死刑執行に関する具体的な規

18) 裁判の合法性が議論の対象となることを認めるものとして、シーボルト・前掲注(8)130頁。

A級戦犯の死刑執行手順書

定がないまま、死刑執行がなされたという問題がある。本稿で取り上げた死刑執行手順書は、そのような問題を背景に作り出された産物であり、この問題をいみじくも示すものであると言えよう。

しかも、一般刑事犯を含めて、死刑執行に関する具体的な規定がないまま、死刑執行がなされているという問題は、60年以上が経過した今日においても解決しておらず、今日にも相通ずる問題として残存している。

本稿で紹介し分析した文書は、単に歴史的な意義を有するだけでなく、今日においてもなお立法による解決がなされていない死刑執行に関する問題を提起するという意義を有している。

死刑執行に関する具体的な規定が法律で明確にされることによって、立法不作為が早急に解消されることが求められる。

* 本研究は、一般財団法人司法協会平成24年度研究助成「日本における死刑の実態——死刑選択基準及び死刑執行——」による研究成果の一部です。記して謝意を表します。

【資料1：死刑執行手順書】

秘

合衆国軍
第8軍司令部
憲兵隊長オフィス
APO343

PMKC

1948年12月

覚書き:

タイトル: 被拘禁者の執行

1. 連合国軍最高司令部によって承認された極東国際軍事裁判所の事実認定及び量刑並びに 1948年12月21日付第8軍司令部書状命令 (Letter Order) 12-442号に従って、巣鴨プリズン APO181 に現在収容されている以下の者は、巣鴨プリズン (APO181) において 1948年12月23日午前0時1分又は可能な限りその後すぐに絞首刑により執行する。

土肥原賢二
広田弘毅
板垣征四郎
木村兵太郎

松井石根
武藤章
東條英機

2. 執行は非公開とする。第8軍の憲兵隊長を通じて第8軍の司令官によって証人として本文書において指名された者のみが執行に立ち会うために巣鴨プリズンに立入ることが許可される。

3. 記者又はカメラマンは立入りを許可されない。写真又は映画は作成されない。巣鴨プリズンの戒護区域内においてカメラは許可されない。

4. 執行場所はあらゆる種類の許可されていない者の立入り又は妨害を防ぐために厳重にしっかりと監視される。巣鴨プリズンの所長はこの監視に責任を有する。

5. 被執行者は、指定された通訳を通じて 1948年12月21日夕刻に執行日時を通告される。

6. 巣鴨プリズンの所長又はその代理人、通訳、書記官、巣鴨プリズンの軍帯同司祭、死刑囚の信仰する宗教家は、被執行者が執行日時を通告される際、立ち会うものとする。極東国際軍事裁判所の事実認定及び量刑に対する連合国軍最高司令部による審査及び第8軍司令部書状命令 12-442号が十分な能力のある通訳によって死刑囚の母国語により死刑囚に読み上げられる。死刑囚は彼らが理解したことが書かれた(indieat)陳述書に署名す

秘

秘

PMKC 覚書き

タイトル: 被拘禁者の執行

ることを求められる死刑囚は上述の文書を理解したかどうか尋ねられる。彼らが署名をしない場合、死刑囚が 1948 年 12 月 21 日に通告されたことを立会人が証明する。教誨師及び宗教家は通告から執行に至る間継続して死刑囚に対する精神的な助言者として用いられ、死刑囚に対してその間常に接触することが認められる。

7. 巣鴨プリズンの教誨師は絞首台の最下部まで死刑囚に付き添う。

8. 執行後に遺体を確認して生命が途絶えたことを宣告するため、巣鴨プリズンの所長は 2 人の軍医を、第 8 軍は 4 人の医療部隊の職員を執行に立ち会わせるものとする。医官は死亡証明書を用意する。(死刑囚各人につき 1 枚ずつの謄本は執行報告書に添付される)

9. 執行官は■■■■■■■■■■とする。その補助者は■■■■■■■■■■とする。■■■■■■■■■■は執行の際の技術的な細部に至る全事項に責任を有する。

10. 執行前 24 時間以内に■■■■又は■■■■は全ての必要な設備が非常に優れた状態にあることを確認するために徹底的な点検を実施する。巣鴨プリズンの所長は必要なロープ、目隠しフード、腰ベルト並びに腕及び脚の枷を提供する。巣鴨プリズンの所長は 4 つの落とし板を直ちに利用できるようにする。(軍務省パンフレット 27-4)

11. 巣鴨プリズンの作戦指揮官は、執行前に護衛兵及び死刑囚守備隊を配置する。

12. 巣鴨プリズンの所長は、護衛兵として行動させるリストに掲載される 8 名の者及び除去部隊として追加的にリストに載せられる 8 名の者を選び、利用可能にする。

13. 死刑囚の指紋は、遺体の最終処分前に押捺される。

14. 死刑囚は、4 人の 1 つのグループと 3 人の 1 つのグループに分かれ、死刑囚舎房から絞首台の壇まで指揮官及び必要な護衛兵によって護衛される。その場所で、死刑囚は執行責任者に同定される。執行者は技術的な点を細部に至るまで完全なものとする。その後、責任者の指示により、踏板が外される。設備の機械的な不具合の結果、執行が完全に終了しなかった場合、所定の刑罰が完了されるまで手続が繰り返される。

秘



PMKC 覚書き

タイトル: 被拘禁者の執行

15. 巣鴨プリズンの所長は、監視の下、執行後可及的速やかに死刑囚の遺体を死亡記録サービス将校に引き渡す。遺体の最終的処分は、第8軍の将校の監督の下で現行の命令に従って実施される。

16. 執行部隊は以下の者からなる。

- | | |
|----------|-------------------------------------------------|
| 責任者 | - 憲兵隊 Victor W. Phelps 大佐 |
| | 又は |
| | 沿岸砲兵隊 M. C. Handwerk 大佐 |
| 執行官 | - ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ |
| 執行補助者 | - ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ |
| 執行補助者 | - ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ |
| 執行補助者 | - ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ |
| 書記官 | - 憲兵隊 William F. Gilfillan, Jr. 大尉 |
| 軍帯同司祭 | - 牧師 Patrick D. Walsh 少佐 |
| 医官 | - 海兵隊 Paul C. Sheldon 中佐 |
| 医官 | - 海兵隊 John J. Pe????? 海兵隊 Arthur H. Thompson 中佐 |
| 医官 | - 海兵隊 Loroy Lamm 大尉 |
| 医官 | - 海兵隊 John R. ???y?? 海兵隊 T. T. Beauty 大尉 |
| 医官 | - 巣鴨プリズンの所長によって指名された者 |
| 医官 | - 巣鴨プリズンの所長によって指名された者 |
| 死亡記録サービス | - 補給部 Luther Frierson 少佐 |
| 通訳 | - Makoto Sugino 軍曹 |
| 教誨師 | - 花山教誨師 |
| 護衛兵 | - 巣鴨プリズン所長によって指名されリストに載せられた 8 名の者 |
| 必要な追加職員 | - 巣鴨プリズン所長によって指名された者 |

17. 証人は以下の者とする。

- 巣鴨プリズン所長 M. C. Handwerk 大佐
- 第8軍軍医 R. E. Hewitt 大佐
- 第8軍公的情報局 Harold G. Wilson 中佐
- 第8軍将校 Bruce E. Kendall 中佐
- 第8軍法務課 Cyril D. Hill 中佐
- William J. Sebald 氏
- Patrick Shaw 氏
- 商震 (Shang Chen) 二級上将
- Kuzma N. Derevyanko 中將

秘

PMKC 覚書き

タイトル: 被拘禁者の執行

巣鴨プリズンに配属されていない証人及び執行部隊の構成員は 1948 年 12 月 22 日 22 時 30 分に指定された集合地点に出頭する。この者たちは、1948 年 12 月 23 日 0 時 1 分の執行に職務を果たせるように、巣鴨プリズンの車両により同地点から巣鴨プリズンまで運ばれる。巣鴨プリズンの所長は準備を整えておかなければならない。

18. 書記官は、必要な記録が準備され、署名され、転送されることを見守る責任を負う。

19. 死刑囚側を不適切に傷付けることを避けるために、あらゆる予防策がとられなければならない。

20. 執行は、適切な厳粛さを持って見守られる。軍隊的な正確さを持って実施されなければならない。関与者は示威的態度をとってはならず、あらゆる種類の不適切な行為が許容されない。

21. この覚書の機密区分は、1948 年 12 月 23 日午前 8 時 に部外秘に変更される。

Victor W. Phelps

VICTOR W. PHELPS 大佐 憲兵隊

憲兵隊長

4

秘

《訳者注》ゴシック体斜体字 は手書きの部分である。